

## 第21話 大正2年の「木津切れ」は四個所の堤防を破って流れ込んできた洪水

大正2年の木津切れと大正6年の曾川切れの二つで、亀田郷の大水害は終わりです。この2つの大洪水は、亀田郷の水害対策に大きな転換をもたらしました。今回は、大正2年の木津切れの様子を、当時の「新潟新聞」をもとに調べます。

大正2年8月27日の新聞には、長野発の通信と新潟測候所の報道として、「26日夜来降雨甚だしく、鳥居川、千曲川はいずれも2、3尺ずつ増水せるが、夜に入るもやまざるにおいては、いきおい越後方面増水を見るべし。(長野電話)」「信州地方に豪雨ありたるため、信濃川及び阿賀野川を始めその他管内各川出水の虞れあり。(27日午後3時新潟測候所報)」と発表しました。風速25m、730耗(973hpa)という猛烈台風が東京湾口に襲来したためでした。「28日正午、中蒲原郡横越村大字木津字五本榎字二本木外三ヶ字共用阿賀野川樋管、本年伏設替のヶ所約15間破壊し、ために大字二本木袋津の耕地の一带より沼垂町まで浸水するに至れり。」と木津破堤を新聞は報じています。

新聞をもう少し詳しく読むと、「阿賀野川筋木津破堤の原因は横越村においては、津川増水の通知を得、揚水機付近を油断なく警戒中、市新方面破堤の水流が、阿賀浦方面破堤の余流と合一して、満日村大字大蔵小阿賀野川堤防を突破し、その流勢の衝突したるため、警戒なき対岸五本榎の底樋よりたちまち堤防を欠壊するに至りたるものにして、その時刻は、一昨日(28日)正午なりき。(後略)」

「木津切れ」と呼ばれる大洪水ですが、小阿賀野川の堤防が木津で切れたという単純なものではありません。

この破堤は、まず、新津地区の市新と阿賀浦の二個所で阿賀野川堤防が切れたことが始まりです。この二個所からの濁流が、小阿賀野川左岸の大蔵地区へ押し寄せましたが、そこに止まっていませんでした。濁流は堤防を内側から突き破って小阿賀野川に流れ出、木津側堤防の揚水樋管を破壊し、横越島に流れ込んだのです。つまり、阿賀野川本流で新津地域左岸堤防二個所と小阿賀野川左岸堤防と右岸堤防の合計四個所を破堤したのです。木津での破堤の前に三個所の堤防を打ち破り、それがそのまま木津付近を破ったという猛烈な洪水だったわけです。



4つの堤防を破った「木津切れ」(「新潟新聞」記事より構成)

## 第22話 亀田郷での「木津切れ」の被害の様子とそれ以後

新潟新聞では、さらに亀田郷全域の惨状を「これが結果として濁流滔々としてほとんど二十一大区の全部を襲い、亀田方面は、昨日中なお湛水四五尺に及び、沼垂方面もまた、しばしば鐘を鳴らして法螺を吹きて防禦に力め、下流地方の横越小杉の耕地は、残す所なく浸水して、大淵蔵岡方面もまた床上浸水の惨状を呈せり。堤防欠壊の全長は、24間に及び、村民は総出で水戸止めに尽力しつつあるが、大字木津にて奔流中に流失せる家屋17戸に及び、立木に上り避難せる者、立木の根こそぎとなりたるため、相抱きてみるみる水中に没する者、乳倉に乗りたるまま流れ行く嬰兒など、惨状ほとほと目も当てられず。（中略）栗ノ木川に架っている沼垂の大橋の所へ来ると、濁流滔々、まさに沼垂町を呑み去らんとするが如き凄ましい勢で流れている。栗ノ木川の両岸はすぐ家だ。危ない話である。白山社の前へ来てみると、白山社の境内はすでに水に没し、神社だけが水の上に浮かんでいる。（中略）木津から流れ込んでいる濁流は、滔々四方に泥濘して、今は姥ヶ山、山潟、山二ツ方面までひろがって、ために、中蒲原郡の大半は、ほとんど泥海の中に没入したという悲惨なる光景を現わしているのである。」とあります。

破堤以後の動きは、「水と土と農民」（亀田郷土地改良史）より読んでみます。この「木津破堤」という大正2年の阿賀野川の大氾濫は、中蒲原・北蒲原の両郡で、冠水耕地45,000町歩、浸水家屋12,000余戸という大きな被害をもたらしました。阿賀野川改修を求める声が、この水害を機にして関係町村で盛り上がりました。大災害を受け、北蒲・中蒲の代表者が同年11月に会合して、阿賀野川治水を求める運動を協力してやっていくことを決めました。12月には、中蒲原郡役所で「中蒲原郡阿賀野川治水会」を結成し、国、県に対して阿賀野川改修の早期実現を訴えました。

新潟県議会は、改修事業費中の県負担予定分を、一括繰り上げ支出することをきめ、政府に対し大正4年度からの事業開始を要請しました。地元の熱心な姿勢に押された政府は、大正4年4月に内務省告示をもって阿賀野川改修工事を決定しました。工費800万円、9ヶ年間の継続事業で阿賀野川の馬下より下流36kmを対象に、河幅は馬下→論瀬間430m、論瀬→河口を900mと大幅に拡幅しました。さらに、沢海付近での大蛇行の改善と川底の浚渫を行い、毎秒6,950m<sup>3</sup>の流量まで耐えられる立派なものにしました。また、小阿賀野川の分岐点に閘門を設置し、小阿賀野川破堤を防ぐように改善しました。この工事も、第一次大戦や昭和恐慌などにより、当初予定していた工期ではとても終わらず、19年目の昭和8年に総工費1,200万円ようやく完了しました。



阿賀野川の現在の河道

## 第23話 曾川切れ（1） 曾川切れの沼垂町

歴史に残る「曾川切れ」は、大正6年（1917年）9月末日に上陸した台風によるものでした。台風は、沼津に上陸、関東より奥羽東部へと北進して各地で死者1127人を出したのです。新潟県への影響も大きいものでした。大雨は、長野県・福島県・新潟県内南魚沼等で160ミリ～220ミリを超えました。最高水位は、阿賀野川筋の津川で34尺、信濃川筋の小千谷で17.5尺でした。10月2日未明、天野新田地内の用水樋管の所で堤防が決壊しました。

最初の破堤場所は、曾野木村大字曾川新田地先大野に通ずる天野地内渡場付近です。信濃川、小阿賀野川、大通川、中ノ口川などの川々が、互いに影響しあう場所といえるあたりです。午前3時半頃、信濃川堤防は6尺余り決壊して濁流が流れ込み始めました。村民50余名で防禦に努めましたが、ついに12時頃に至り、約120間が決壊してしまいました。これより先き、午前9時頃、第二親松堤防が決壊、濁流が相い合して非常な勢となりました。濁流は、一方は早通村を経て鳥屋野潟方面に進み、一方は酒屋町方面に逆流、一方は鳥屋野村より石山村に出て栗ノ木川から沼垂町を襲わんとし、一方は亀田町に浸入せんとしました。沼垂町、早通へ向かった濁流で、午後1時30分には沼垂の一部低地は、徐々に浸水し始めました。県では応援巡查30名を曾川方面へ、50名を沼垂方面へ派遣しました。

また、新潟消防隊では警鐘点打の上、応援消防隊300余名を召集、即刻急行させました。鳥屋野潟や栗ノ木川に注いで沼垂町へ向かった水流は激しいものでした。沼垂町民は、新潟市消防団の応援を得て栗ノ木川堤防嵩上げを行い、浸水防禦に努めました。しかし、午後7時頃には、その堤防も破られ、濁流奔騰、全町たちまち阿鼻叫喚の巷と化しました。全町が泥海の如く化してしまっただけです。屋内はすでに濁流流れ込み、床上げする暇もなく、泥水の流れるが俛のほかなしです。家の中では、家具家財の取片付けで忽ち戦場と化しました。子どものいる家は、にわか洪水に驚き、悲鳴を上げて避難するほかにありません。8時過ぎ、既に沼垂町一ノ町より五ノ町方面は、街路の上、約4尺以上に達しました。家々への浸水4尺～5尺位で、二階のない家は、社寺及び鉄道線路上に避難する者多数でした。白山神社を始め、各寺院は、ほとんど人と家財道具で埋まってしまった程です。全町すべて浸水しない所はない状態でした。

ことに最もひどかったのは、馬越往来及び沼垂停車場付近、蒲原長峰方面でした。この方面は、ほとんど家に居れない程の惨害を蒙りました。家財道具もすべて水に濡れ、あるいは押し流されたのです。栗ノ木川上手の月見橋は流失し、栗ノ木川鉄橋も多少動揺を感じずる様になりました。鉄道と郵便物は不通となりました。飲料水も欠乏し、新潟から舁五隻で運搬し、給水しなければならない地域も出ました。沼垂小学校は三日以来休校せざるを得ませんでした。



写真「曾川切れの時の沼垂町」(『写真集ふるさとの百年』《新潟日報事業社》)

## 第24話 曾川切れ（2） 亀田の洪水騒ぎ 床上浸水6尺

大正6（1917）年10月2日、曾ノ木方面堤防破堤の連絡が亀田町に届きました。破堤した濁流が、町に押し寄せてくるのを、泥濘堤防で食い止めなくてはなりません。亀田町では警鐘を乱打し、消防隊を出動させて町民と協力、防御の準備に尽くしました。役場の職員も総出となり、町民と共に必死となって防ぎました。しかし、濁流は次第に増水して堤防に押し寄せました。ついに午後6時、頼みの泥濘堤防は破られてしまいました。あとからあとから押し寄せる濁流はすさまじい勢いで、東西より亀田町を襲いました。そのため、全町大混乱の巷と化してしまいました。亀田町は全戸数1610戸中、床上浸水が742戸、床下浸水が173戸という災厄でした。床上浸水が6尺余に達した家さえありました。袋津方面はやや被害は少ないものの、4年前の木津切れに比べると1尺以上の浸水でした。そのため、町内では、その日の食事に困窮する人も多数出ました。（困窮した町民の救済としての炊き出しなどについては、5月号でお伝えしました。）亀田を襲った洪水の影響は大きいものであったのです。

この洪水で、鉄道も大変な被害を受けたのです。新潟と亀田間の鉄道線は、全部濁流を以て覆われてしまいました。2日午後7時半、沼垂―亀田駅間の線路10余間欠壊し押し流されました。両駅間の十余個所の鉄橋は、ほとんど全部沈下または破壊、墜落のありさまでした。上りは午後7時8分から、下りは午後8時15分新潟駅発より全列車運転中止となりました。3日も依然運転中止となり、全く交通運輸の杜絶という有様でした。その後なおも漸次増水の傾向あり、惨害の程度は、益々激甚となりました。被害の状況から、鉄道復旧は、減水後少なくとも1週間以上は必要と考えられる程でした。

郡内の亀田以外の町村での被害も激甚でした。被災地巡視の北川県知事は、破堤場所の締め切り工事を急がせました。さらに、信濃川の減水を見て、郷内の濁水を減らすため信濃川堤防切り払いを命じました。萬代橋の上手、上所地内の堤防を3間ほど切り払わせたのです。しかし、これで洪水の被害が解決というわけには行きませんでした。逆に、夕方には再び増水し始めました。亀田郷の排水路である栗ノ木川が、今回の洪水では機能しなかったのです。栗の木川の信濃川への出口「石造水門」が、濁水排出を逆に食い止めていたのです。明治32年、信濃川からの逆流防止のため苦勞して作った水門でした。今回は、この「石造水門」の爆破しか、洪水排除のために残された道はありません。爆破作業には、3日の午後からとりかかりました。



「曾川切れで水没した亀田町」（「写真集 亀田の百年」）

## 第25話 曾川切れ(3) 栗ノ木川石造水門(石造閘門)爆破 その1

泥の海と化した沼垂は、3日午後四時になってもなお刻々増水し、何時減水するかほとんど予測できないほどでした。倒壊する家屋もふえる一方です。このままもう一昼夜過ぎたら、沼垂全町は容易に再起不能となるのではと考えられました。

それを避けるため、萬代橋の上流450mの鳥屋野村大字上所あたりの信濃川堤防を約3間切り払い、排水を試みました。しかし、沼垂よりも上流部であったので容易に減水せず、さらに夕刻には、正午頃より2寸の増量を見るほどでとなりました。

この上は、栗ノ木川の下流にある俗称「石造水門」を破壊する外ないと考えられました。石造水門を破壊すれば減水間違いなしと考えられ、直ちにこれを爆破する事に決したのです。石造水門は、3月号で詳述した通り、信濃川から栗ノ木川への逆流を防ぐために苦勞して設置したものでした。今回の水害は、皮肉にもその石水造門が、栗ノ木川からの排水を妨げる水門となったのでした。石造水門爆破は、容易なものではありませんでした。新潟市は、新潟消防組員等二百余名を急派して、その準備に着手させました。

一方、四時半、県より土木課中村技師、保安課湧井技師の両氏が、ダイナマイトの用意をした上、同所に急行し、石造水門の実況を検分し、爆破の準備を急ぎました。現場は、濁流が矢のごとく奔流し、小船で近づくことも容易ではありませんでした。そのため、ダイナマイト装着の準備は、すこぶる困難を極めました。しかし、勇敢な消防夫の必死の奮闘によって、午後6時準備が完了しました。



「栗ノ木川石造水門」の位置図（地図は大正3年版地形図より）

## 第26話 曾川切れ（4） 栗ノ木川石造水門爆破 その2

「新潟新聞」の記事では、「石造水門」の爆破の有様が以下のように詳述されています。

付近一帯危険の迫れるため、警官は声をからして群衆一同を他へ避けしめ、爆発決行の時を待つ。6時30分、すわや口火は点ぜられぬ。たちまち轟然たる爆音と共に、濁水はあたかも天うつ浪の如く、巨石粉碎水煙火柱天に沖し、壮絶凄絶の状真に言語に絶す。と見る間に幅三間、高さ十数尺のさしも堅牢なる中央石水門は、その五分の一を破壊され、その水面上を露出せる頭部跡方も無く、濁流その上を奔下す。次で7時10分、再びダイナマイトの装置を終わり、轟然爆発せしめ、ここに於て更に残部はほとんど粉碎し去り、濁流は漸次猛烈となり、付近の水勢渦を巻いて危険甚だしく、容易に近づくべからず。装置頗る困難に陥る。

ここにおいて、勇敢なる消防夫の活動となり、危険を冒して水中に飛び入り、渦巻く激流と奮闘すること暫し、漸く3回目のダイナマイト装置を終わると、口火は点ぜられ、8時、更に天地も砕けんばかりの一大音響と共に爆発したるより、残部は見ん事に粉碎し去らる。濁水たちまち滝、津波の如く、轟々滔々信濃川へ落込む。凄まじ何とも形容の辞なし。

同時に付近一帯に氾濫しつつある濁水は、これまたその余勢を受けて流動し、刻々その勢を増して奔流し、三十分と経たざる内、早くも入船町一町目付近は、1尺の減水を見たり。さればいよいよその残底を破壊し去るべく、8時30分、9時の両度引き続いてこれを爆発せしめ、ついに大成功裡に全部の粉碎をなし終わんぬ。

濁流は、刻一刻減水しつつあり。12時には、すでに付近の減水2尺に及びたり。

以上の如く、栗ノ木川石水門中央一個所の破壊により、さしも暴威を逞しうしつつある濁流も、刻々減水しゆくの好成績を収め得たるより、4日早朝、さらに両端の二箇所をも爆破し去るべく、徹夜これが準備をなし居れり。

4日早朝、本県より中村、湧井の両技師現場に出張し、破壊に着手し、2発のダイナマイトを以て、全部を破壊しつくしたるが、これがため、濁水は一層激出せるより、沼垂氾濫は減水また減水に正午頃には、すでに2尺以上を減じ、全町約七分の一位は、床上浸水の憂き目を脱することを得、街路も各所に露出するに至りしより、全町民は狂喜して、寸時も早く全町より濁水の減退するを待ちつつたり。

大正6年10月2日未明に発生した「曾川切れ」は、このように一応解決の目途がたちました。「水と土と農民」（亀田郷土地改良区）では、この「曾川切れ」での亀田郷農業の被害について、「当時の全耕地6,480町歩の約9割にあたる6,020町歩が冠水した。破堤箇所曽野木村、中央低湿地の「鳥屋野村・石山村・早通村の計4ヶ村が、100%の冠水率であったため、泥土の埋没によって荒蕪地となった田畑は、100町歩」と伝えています。多くの鉄橋に被害があった信越線の損害も軽微なものではなく、復旧に時間がかかりました。爆破された栗ノ木川逆流防止のための石造水門は、大正7年に復旧されました。

この「曾川切れ」以後、阿賀野川改修や大河津分水完成などもあり、亀田郷では洪水に

